別13
60
2

国立国会図書館　　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

108
259

35.6.15

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

108
259

濟

宿命

(八)

生改

七十三枚

初稿 三百字四枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

108
259

失敗

神戸で開いた牧師舎に出席しての帰るさ、
音無は大阪へ一晩泊って、
と道頓堀の夜景を見に行った。
水元ら門並の看板を見るとは無しに見惚れつゝ、中座の前で来ると、大きな立看板に墨黒々と文芸座演劇寫真、讃師高木助雄迄とあるのが忽ち眼に留った。
「高木助雄？　学院に居た芝居の上手な高

3375

木ぢや無いかナ。」と呟（つぶや）きつゝ、講師の名前に牽（ひ）かれてツイ入（はい）つて見る氣になり、二等席に陣（ぢん）取（ど）つたが、座舛（おます）の景氣（けいき）とは打（う）つて變つた不入（ふいり）で、場内はがらんとして居た。

一二分経つと電氣が暗くなつて、映（うつ）し出（だ）されたのはミルトンの失樂園（しつらくゑん）悪魔（あくま）の評定（ひやうぢやう）の場であつた。辯士（べんし）は普通の活辯（くわつべん）であつたが、字幕が面白いので夢中になつてフヰルムの跡（あと）を追つてゐると、軈（やが）て一時間ばかりして、幕間（まくあひ）のヰオリンの獨奏が始つて、次のフヰルムに移

108
259

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

る前、小柄な色白のギヨウテに似た長髪の男がフロツク姿で舞臺に現はれた。

「高木君だ、高木君だ。」と音無は一目見て我知らず下足札で膝を打いた。

高木は物柔かな沈着した口調で、先づミルトンの生立から二十七年間の失樂園の苦心、しかも其の苦辛に對する報酬が僅かに十磅であつた事を述べ、更に英國魂の説明から轉じて我日本魂の英國魂に劣らぬ所以、此の清い日本魂がマニモニや、モーロツクのやうな悪

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

魔に汚されざらん事を欲する希望をまつ陣の
終つた時、喝采は先づ二階の正面から起つた。
賑つてつ井んムは一時間程掛つて人間の最初の
悲壮なる歴史を段々と展開して今を終つた時
音楽は荘厳として夢幻の世界から初めて現
実在界へ帰つたやうな氣がした。
「四先ア、音楽さんやア楽くつて？」
木戸口の所で後から声を掛けたものがあつ
たので振向いて見ると、甚所んは思いかけも
無い時子が立つて居た。

108
259

339

「やっ、時子さん、どうしたの、新しい所にでも
「どうしていて、」と時子は
私、半月も前から大阪に来てるのよ。昔ここで
どうしてて、」
時子は眼の覚めるやうな
大きな縞巻の派手な帯を締め、思ひ切つて出
した廂髪にはでかく〳〵しく櫛やピンを飾り立
てゝ、どうしても十八九にしか見えなかつた。
「兎に角外へ出ませう。音無は靴を下足番
から受取つて外で待つてゐるから、左手の木戸

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

に から高木が出て来た。
「高木君！」音無は甚側（えんがは）へ駆寄（かけよ）つた。
「やア、音無君ぢやないか。僕もとう／＼活辯（くわつべん）がやア無くて活講（かつかう）師になつたよ。」
「面白かつた、なか／＼面白かつた。」
「時に音無君、君は今何所（どこ）に居るのだい。」
「僕は紀州（きしう）の熊野（くまの）に居る。」
「さうか、えらい所に居るんだネ。」
話して居る所へ時子が来て、「音無さん、御紹介（ごせうかい）下さいましナ。」と小声で言つた。

『高木君、此の方は私、熊野の町の松本時子さんで、ミッション女学校の御出身です』

音無が紹介した時、時子は初々しげに『どうぞ宜しく……』と丁寧に頭を下げた。

『久し振だネ音無君、お差支が無けりゃア松本さんと御一緒にカフェーへでも御伴致しませう』高木はポケットから一寸時計を出して見ながら言つた。

『参りませう、暫く話しませう』と言つたら音無は時子を顧みて『宜いでせう』、私、松

本さん……」

「えゝ、お伴致しますわ。私、」

高木が先へ立つて行く踵から音竜と時子とが蹤いて二町程行くと左側に〝旗節バア〟と硝子戸に書かれた家があつた。

三人は其処へ入つてカフエーを飲みながら暫く種んな話をして居たが、高木は、

「どうだらう、君、あの活動写真を熊野へ持つて行つては。」と言つた。

「夫れは宜いわ、しかし収支償はないなら

う。

實はネ、あのフヰルムは杉本商會がパテ會社から二千円で買つたのだ。佛蘭西(ふらんす)一流の俳(はい)優(ゆう)が何百人も掛つて演(や)つた大芝居(おほしばゐ)だから、價値はあるが、日本ではマダあア云ふものは向きませんナ。ジゴマのやうな物で無くツちやア。そこで何とかして元金(ぐわんきん)だけでも回復しようといふので、僕が活動講師といふ觸れ出しで文藝活動寫眞會といふのを組織して、市内の宗教家や教育家を頼んで最初失楽園の

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

348

講演屋を用いて無料入場（無料で二千人ばかりを集めて置いて）にし、沈に（あの）大看板を出して封切（ふうきり）をやつたんだが、御覧の通りの不入（いり）で小屋代も取れないといふ不始末（ふしまつ）さ。これぢやアとてもやり切れないから実は秋頃から教育会や、教会へ交渉して会費制にでもして（や）演つて見ようかと勘考（かんかうちゆう）中なのサ。そこでだ、僕が急に角文芸講演研究会なるものを組織した功労に対し、杉本商会は十日なり半月なりはあのフヰルムを無料で僕に貸して呉れる事になつてるんだ。だから僕も熊野観光（くまのかんくわう）

旁、熊野へ行つてみようかと今一寸思ひ付いた所サ。』

『夫れは大變結構ですワ。しかし一晩の費用がどれ位いかゝりませう。』時子は胸に考へを有つてゐるらしく訊いた。

『さア、機械は無料で使ふとした所で、技師、辯士、往復の旅費……大分かゝりますナ矢張り……』と言つて高木は何か考へ込んで居たが、『音無君、あの活動寫眞へ僕達の組織してゐる新劇協會の一座を加へて乗込まし

348

か。

「夫れは大変だよ、経費が。」音羽は不安さうな顔をしながら言つた。

「なアに甚様(そんな)に澤山は要らない(い)よ。新しい芝居と、あのフヰルムを持つて行くんだもの、少くとも一日に五百人は入る(はひ)だらう。平均一人前三十銭の入場料として百五十円、三晩で四百五十円、税金、小屋代(こやだい)、旅費、給料、……さうだな百五十円も足せば充分だよ」

「毎晩五百人ずつ入るとして百五十円の損だわ。」

今朝二〇（神楽坂下山田製）

346

「さうだ、甚の位の金は何とか出来るだらう。教育会とか教会とかで……」
「さア、教会と云つた所で、何所の教会も貧乏（びんぼう）だし、教育会は活動写真を生徒に見させるかどうか夫れが疑問だし。」
「新聞社に応援（おうえん）して貰へないかネ。割引券でも刷込（すりこ）むやうにして」
高木がさう言つた時、音無は礒と手を拍つて、「さうだ、君、石塚君を知つてるだらう。石塚覚也（いしつかかくや）君を……」

349

「あア、知つてる／＼、三陸海嘯（さんりくかいせう）の孤児（こじ）だらう。あの自修寮（じしふれう）に居た。」

「さう／＼、あの石塚君が今鉄道の町に居て新聞記者をして居るよ。」

「え？、夫れは好都合だ。どんな新聞かい夫れは？、」

「其の新聞はね、隔日刊行（かんかう）の小い新聞ではあるが、田宮といふドクトルが資本を出して居る『サンセツト』ちふ気（き）の利いた新聞だよ。東京あたりの一流の文士達も毎号投書する

348

ので文藝欄なんぞは振つたものだよ。

「あア、あの新聞か、僕も何所（どこ）かで見た事がある、石塚君が其所（そこ）に居るのか、夫れは宜い都合だ、新聞社の方で百五十円ばかり引受けて呉れりやア、僕は協会（けふくわい）の一座を率（ひき）ゐて直ぐ乗込むから。

「では、僕は帰つて直ぐ石塚君に相談して見る、そして出来そうなら電報を打（う）つから。

「よろし、行かう！　中座（なかざ）の方も三日後に打揚（うちあ）がるんだから……

音無も高木も非常に乗気（のりき）になつた所へ、時子は傍（はた）から、
「音無さん、斯うなすつて下さいナ。其の五十円は私がお引受致しますから、あなた石塚（いしづか）さんと御相談の上、新聞社の主催として発表して下さいませんか、お金の事は決して新聞社へ御心配（しんぱい）をかけませんから、主催者（しゆさいしや）になつて戴くやうに、高木を田宮さんと石塚（いしづか）さんへお願ひして下さいましよ」
「ええ、五十円は貴女（あなた）がお引受下さいま

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

すか」高木は莞爾(にっこり)と笑ひ乍ら言つた。

「あなたが……時子さんがお宅の方を引受けてくださるなら、私は我国死側(がは)の方を引受けて訴訟事務(ことむ)に成れり！」

とふやうに軽く右の掌(てのひら)で机を打(た)き乍ら言つた。

高木は更にカフェーを註文しながら、ロさうく学院で『芝居』といふ名を宣教師が嫌ふので、表情演説(へんぜつ)といふ名でハラプトマこをやつた事があつたつけね。あの時にケエテヲ

08
59

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

ツケラアトに拶した……』と言ひかけた時、
時子は直ぐ其の言葉の後を捉つて、
『吉座ナオミさんでせう、其のお方も熊野に
居らつしやるのよ、新宮に』
『然う？ 夫れは面白い。』と高木は驚いた
顔をして『学院時代の芝居仲間が皆な集つて
るんだわ。夫れは是非行かねばならないぢや
ないか。』
三人は思はず顔を見合した。

二行アキ

五

音勇は翌日川口から汽船に乗つた。二日目の正午過に新宮の町へ帰ると直ぐ田実の家を訪問した。

「早かつたね、東京へは行かなかつたですか。」薬局の所から首だけ突出した田実はニコ〳〵笑ひ乍ら言つた。

「大阪から引返して来ました。少し相談したい事が出来たので。」

「さうか、まア上り給へ、」直ぐ僕は手が隙す

08-59

353

くから。」

音無は奥の一室へ通つて書君の慶子と四方山の話をして居ると、

「どうです、牧師舎んは面白い問題がありましたか。」

「いゝや千々万々です。先ア友人の顔を見に行くんですナ。」

「さうなネ、夫れは大變意味のある事だよ。僧等のやる迄舎なんて矢張り一種の親睦舎さ。」

「所が、僕は今度の教師會で思ひ懸けない友人に遭ひましてね、夫れで御相談に上つたのですが……」

音無は道頓堀で高木と時子とに遭つた話から、高木の率（ひき）ゐる新劇協會一座を新富へ招く事に就いて詳（くは）しく話した。

「夫れは非常に面白い事だ、一体此の町の芝居といふものは、こりやア何とかしなけりやアならないんだから袮。僅かに人口二万足らずの町に劇場が三つもあつて、そして夫れ

中型二〇（新榮堂下山田製）

が年ケ年中興行してるんだからナ。」
「さうですか、そんなに芝居好なんですか、此町の人達は。」
「町の人は芝居が好きだらうが何だらうが役者の方で芝居をせねば死んで了ふからネ。」
「どう云ふ理由ですか夫れは？、」
「先ア大阪辺から一座二十人位の俳優を傭つて来るだらう、木戸銭十五銭位に中桝五十銭取つて、やつと給金と船賃が一杯一杯だ。
十日なり二週間の興行が済んで興行主と俳優

との総勘定は済むが、俳優は帰る旅費が無い。そこで今度は興行人と分合で木戸銭十銭中揚二十銭位に引下げるんだね。夫れでも一つて一銭の給金も払へなくなる。すると役者の中でも少し善い衣類を着て居る連中や、故郷から金を取られる連中は、旅費を工面して一座から逃げ出すんだ。跡へ残つたへぼ連中ばかりが興行主に泣ついて木戸銭二銭位で芝居をやるんだもの、夫れも三劇場の競争が起ると、木戸銭無料、平場行進退といふので、一

人前二割先の下足料を取るんだ、ネ、さうすると如何(どん)な下らない芝居でも二銭で観(み)られるんだから五六百人は入(はい)るサ。すると十二円あるだらう。税金と小屋代と小物(こもの)料を差引いて三円は残るだらうぢやないかい、お座代が五円だからいで、十五六人の役者が、粥を啜(すす)つて香の物を嚙(かぶ)つて露命(つめい)を繋(つな)ぐのサ。助五郎ちふ歌(か)舞(ぶ)伎役者(きやくしや)なんかは可成(かな)り腕はあるんだが、熊野へ落込んだきり、もう十何年此の町に燻(くす)ぶつてるんだよ。俺は時々劇場へ診察ん行つて

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

女衒か

やるか、彼の化粧部屋の長い座敷の虱だらけな所にゴロゴロ寝ころけて居る態ったら無いよ。太りやア可哀想なもんだ。食ふや食はずに居る連中に藝術もへちまも無いさ。だから出来るッたけ下等な卑猥な事をして舞台の上で見物の機嫌を取る、さうすると芝居といふものは俗悪なものと相場が決って了ふんだ。だから時偶い、芝居が来たッて三日と續きやアしない。音楽君、君なんかの説教は高い高い雲の上を飛んでるんだよ、二万人の中で唯ったった

五人か七人が一週に一遍集つて来るだけぢや
ア無いか。所では斯んな卑猥な芝居が毎晩々々
々々少くとも千五六百人を吸収してるんだから
ネ。こりやア決して小い問題ぢやアないよ。」
「さうですかナア、すると高木君の一座は
高尚過ぎて誰も観ないでせうか。」
「いゝや、然うでも無からう。これで此の
所は案外理解の解つた連中があるんだから
ネ。宜いだらう、やつて見給へ、新聞は石塚
君と相談して勝手に利用しても宜いよ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

360

「さうですか、では今晩石原君と相談致しますから。」

「音無は志上らうとした。田辺は引止あるやうにして、

「君、興行人に知合があるんかえ。」

「いゝえ、誰も……」

「夫れは不可い、先づ雪門の興行人に會つて萬事を頼むんだネ。君の方から大體の見積りを立てゝ夫れから最手こしなきやア、興行て奴は大抵いそんだよ、君。」

08
59

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「では何うすれば宜いでせう？」
「さうだなア」此男は暫く考へて居たが、
「湯桁に頼めば宜いだらう、然し彼奴一寸義侠な男だから……」
「湯桁？」
「興行人ですか、甚人は？」
「興行人です　以前加藤年務の興行人だつたのだが、欲張り[illegible]の一人で、此町へ興行に来て大失敗した結果、今度は儲けよう、今度はこれは……と藻掻けば藻掻く程借金が嵩なつて、足抜が出来ないのサ。若い頃東京の丸善

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

962

で看護をして居たとかで、一寸した横文字の表紙位は讀めるし、話も解る男だから行つて相談して見給へ、或は一肌脱ぐかも知れないよ。」

「では行つて頼んで見ませう、あなたから紹介されたと言へば宜いですネ。」

「うん、さう言ひ給へ、兎に角此の男は此町の興行界の大將だから、事によると君と當桁と二人が協同して新宮の演劇界を大刷新出來るかも知れないよ。」本當に戯言ぢやアない

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

360

一行アキ

よ。

書生の平石（ひらいし）が泡の室から患者が来たと知らしたので、田原は診察室の方へ出て行った。

吾輩は田原の指揮の言葉が現実になるやうな心持がした。そして希望に導かれるやうな感じを懐きながら田原の家を出て湯桁（ゆげた）の訪問した。夫れは町外れ（まちはづれ）の裏長屋（うらながや）であった。

湯桁（ゆげた）は浴衣（ゆかた）がけで食盤（ちゃぶだい）の前に胡坐（あぐら）をかいて酒を飲んで居た。四十三四歳の中肉中脊（ちゅうにくちゅうぜい）の顔

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

08-59

の四角な男であつた。最初の程は胡乱臭い奴(うろんくさ)が来たと言はぬばかりの顔で、ちろ〳〵と音無の部屋を見て居たが、名刺(めいし)を渡して由来から、湯桁(ゆけた)は何かに就いての紹介だと言つたので、やはらまれげて、

「やア、どうも失礼致しました。何か御用で？」と慇懃(いんぎん)に叩頭(おじぎ)をした。

「高木助雄君は、私も大阪でお世話にあつて、あはらやくな陋屋へ恐れ入りました。音無(おとなし)は上り端(はな)に腰を掛けて、用事を手短かに話した。

た事がございます。高本さんが新劇協会の一座を率ゐて入らつしやるなら、私も充分応援力致します。しかし夫れは大分欠損を見込まねばなりません」
「欠損は四五十円と見てあるので、夫れは引受けて呉れる人があるのです」
「さうですか、夫れなら先ア一杯々々に行きませう」と云つて湯玄は一寸思案らしい顔をして居たが、「実は私も最う興行界を引退しようかと思つてゐるので、高本さんの劇団

が来るなら、夫れを打留めに致しませう。即
承知の通り私は興行で飯を食って居るのです
が、今般の興行は無報酬で働きませう。そし
てこれを最後に新しい途を発見するのですナ。
と言って、食盤の前に躍り寄って盃を左の
手に取って、最う冷たくなった酒を一口にグ
ッと飲んで、さも旨さうに唇を舐めた。
「先生は無論絶対の禁酒でございませうね。」
浴衣は空の盃を提げたまゝ訊いた。
「えヽ、以前は飲みましたが、今は一滴も

08-59

367

飲みません。」

「さうですか、私は昔も中毒してみます。今日も酒を買う金がありませんので、薬のへ行つてアルコールを買つて来て、夫れへ水を混ぜて薄めたのです。今飲んで居るのが夫れです。」

「怨うですか。」音無は憐れむやうに横槍の。

顔を顰めた。

「先生、私も斯うなにまで落込んでゐるは人は思はなかつたのです、私は子供上りの時

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

辻新治さんの紹介で丸善の小僧に住込みまして、大分都会よく勤めて番頭にまで経上つて居たのですが、暑中休みに故郷へ帰つた時友達に勧められて、碌く知りもしない花合せをやつたのです。私は到つてあゝいふ博奕(ばくち)めいた事が、嫌(きら)いといふよりも下手(へた)な方で碁(ご)も将棋(しやうぎ)も骨牌(かるた)も殆ど知らないのです。所が因果(いんぐわ)なもので、甚の知りもしない骨牌(かるた)を弄(いぢ)くつて居る所を、ぱつさり巡査に捕まつて、一ケ月投(はう)り込まれたのです。で、店の方は解雇される、出て来て仕事はな

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

し、とう〳〵其頃の壮士仲間に入つて演説会の妨害（ぼうがい）を仕事にして居たのですが、妙な関係から壮士芝居の興行人になりました。五味~~国有神~~だの井上~~井林~~だのは私に世話になつた方です。高田實なども能く一緒に遊んだ方です。所がもう十五六年も前に、此の町へ興行に来て大芝居を演（や）つて居ると、此町に三（さん）角院（かくゐん）の寅（とら）といふドエライ暴（あば）れ者が居ました。夫れには乾児（こぶん）が多勢あつて、興行毎にぞろ〳〵と芝居を見に来るのです。そして若しも木戸

370

刺を出せとでも言はうものなら、黙つて木戸銭を出して置いて、そして甚い復讐をするんです。」湯桁はアルコールを又た一盃飲んで、日甚の悪小市が風変りなんです。芝居が段々面白くなつて、さア喧嘩だとか讐討だとかいふ急所へ来ると、宮奴の助太刀！と叫んで舞臺へ飛出すんです、そして下駄だの雪駄だので思ひ切り役者の頬を打ん殴るんです。讐討の無い人情物になると、愁嘆場では見物が泣かうと構へてゐる壇、乾児と一緒にソロく

中形二〇（神楽坂下山田製）

下駄穿(げたば)きで花路(はなみち)から出て行つて舞臺を無茶(むちゃ)に踊(おど)り廻るんですもの、仕様が無いぢやアありませんか。で、私が興行する時、其の話を聞いたもんだから、私は考へましたネ、どうかして其奴(えいつ)を取つちめる方法が無いかと思つたが、腕力では無論叶(かな)はないし、とうとう斯(と)んな事を考へたんです。湯桁(ゆげた)は徳利のアルコールを又た盃に七分目程酌いで、そして徳利(とくり)を空(そら)と振つて見た。中ではヂヨビ、ヂヨビと音がしたので微(かす)かな笑みを湛(たた)へながら又た話を続けた。

二〇×二〇（神楽坂下山田製）

372

」で、私は興行する前に、斯う云ふ事を言觸らかしたのです。『湯桁は東京で名高い俠客だ。あれが興行中佯つて歩く役者は皆な名高い乱暴者ばかりで日本中何所へ行つても喧嘩に負けた事は無い』さア妙なもので、此の噂が三南院の耳に入つたのです。興行前に、すると寅がやつて来ました、ネ、九寸五分を懐に呑んで……………其所で私は寅と其の乾児二十何人を呼んで一晩延接騒ぎをして飲んだのです。田舎の俠客や博徒の四五十人は何でも無い、

373

鎗でも鉄砲でも来い！　と云って空威張りに威張ったもんですわ。実は私は実の片腕にも足りない弱い者ですが、可笑しいもので、大れ以来三角院は、スッカリ私の乾児になって了いましてネ。事が起ると直ぐ「親方〳〵」ッて言って跳んで来て呉れるんでせう。とう〳〵私は警察から奴は本当の博徒の親分だと睨まれる、町の人達からも俠客々々って言はれるやうになって了ったのです。所が興行は近頃薩張駄目で……！アんコーんに水を混せて

中形二〇（神楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

37 48

芝居の舞臺(ぶたい)で能く見る喧嘩場(けんくわば)に侠客(けふかく)の乾兒(こぶん)が手にして出て来る

飲むといふ始末、あの提灯(ちやうちん)が泣きますよ、あの提灯が……と盃(さかづき)を食盤(ちやぶだい)の上に措(お)いて長押(なげし)の提灯を見上げた。其所(そこ)には細長い提灯が二十ばかりズラリと並んでゐた。

音無は湯桁(ゆげた)の話を非常に面白く聞いた。そして種(いろ)んな事を頼んで置いて帰つた。

二行アキ

五

吾社聊(いささ)か考ふる所あり、社會(しやくわい)改良策(かいりやうさく)の一助(いちじよ)として来る十五日より三日間壽町朝日座に

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

於て、少壮文藝家として聞ゆる高木助碩氏の組織せる日本新劇協會一座を招聘し、佛国文豪ビクトル・ユーゴーの傑作「エルナニ」を公演致し候。同座には特に獨逸哲学博士、皆川正巳氏舞臺監督兼技藝員として加入致し候。

且右新劇の外、英国詩聖彌兒頓が三十年間の苦心に成る大傑作失楽園の大活動寫真を御覧に入れ候、

右は一般観覧者を謝絶し、本紙刷込の入場

半截二〇〇（神楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

券（一回分九百枚）御持参の方に限り入場料金四十銭にて、蒲團、火鉢、茶、一切無料にて差上げ、且つ粗菓進呈仕るべく候。

此の廣告が新聞サンセットの第一面に二号活字で掲載された時は、小い町が俄かに動揺して、町中何所へ行つても芝居の話で持切つたのであつた。

九月十三日の朝、高木助雄の一座二十四人は新宮の町へ乗込んで来た。背川博士は出發

何際に俄に発熱して一座に加はる事が出来なかつた。

高木は宿へ着くと直ぐ音無を招いた。田原も覚也も来た。四人が相談の結果、先づ朝日座で文芸講演会を開く事にした。入場無料が人気を呼んで場内は破る、ばかりの大入で、失楽園とユーゴーに関する四人の講話が何れも聴衆を感動せしめた。

講演会の成功は愈が上にも人気を煽つて、翌日の落陽社は新聞購読者

で上を下へと混雑した。愈々甚の田となつた。開幕前から満場爪も立たぬ程の大入であつた。六時半にエルナニの幕が開いた。高木のソル姫を始め、三浦の山賊エルナニ、水谷のカルロス王、素人と言つても皆相應に舞臺慣れてゐて、一同車輪にや演つて除けたから見物は何れも固唾を飲んで大喝采をした。殊に松本といふ男のシルヴ城内の老侯は迫真に近く出来た。愈々三幕目のエルナニが戀の仇カルロス王を殺しに行かうと決心する所で一先づ芝居を終つて記念寫眞に移つた。

幕の閉ぢた時、見物席から「芝居をやれ、浪新字吉は明晩にせエ」などと叫ぶものもあつたが、いよいよ楽園歓楽の美観や、天魔波旬の壮観が映し出された時は、見物は静まり返つて観た。其晩はアダムとイヴが智慧の樹の実を食ふ夢を見る五巻目の初めまで映して閉会した。

雪崩を打つて出る見物の誰も彼もが、皆な芝居も浪新も面白かつたと取々に評判してゐた。吉兵衛は群集に紛れて評判を嬉しく聞きた

甲数二〇（神楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

一行明キ

381

ら帰つたが、何だか頻りに昂奮(かうふん)して眠られなかつた。三年前に高木が教師を廃(よ)して劇壇の人となると云つた時、教師間で一寸問題にしさうであつたが、極力高木の辯護をしたのは吾輩であつた。其の高木が舞臺の上から數千の人々を自由自在に泣かせたり怒らせたりして居るのを觀(み)た時、声を嗄(か)らして喝采しても五人十人しか集つて来ない自分の境遇に引較べて聊(いささ)か高木を羨(うらや)ましくも思つた。

08-59

381

翌日は（開宴が）開場を待兼ねて一時ドッと崩れる
やうに入場し、即時に満員となつて、リカルおほきど
ド王が長々しい檄白（せりふ）をやつて居る時、大木戸
ぴつたりと騒ぎ立つ声が聞え
た。

四幕目の末にリカルドが神聖帝国の帝座に
陞（のぼ）つて、山城エルナニに
合せなドン、ファン。姫は即身の妻にじろ、
御身は妻する姫を手に入れた。朕は神聖帝国
の帝位を得た。エルナニ！今までの事は一

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

08-59

382

切忘れだ！」の慶詞（ヒリョ）で幕切れになると、満場は破（わ）れ返（かえ）るばかりに喝采（かっさい）した。再び幕が開いて芳五幕目の幕切れのエルナニとソル姫とが妻を仰いで天を指しつゝ固（かた）き契（ちぎ）りを誓（ちか）う美（うつく）しい園へ！」と抱合（だきあ）つた時、廉鑑（れんかん）の巡査は突如（とつじょ）として中止！中止！」と叫んだ。しかし実はこれが統（すべ）てあつたので、警吏（けいり）の中止は無意味であつた。

続いて活動写真となつて、先（ま）ず五巻の後半から映（うつ）し初（はじ）めたが、九巻の初めの悪魔（あくま）が妻蛇（とぐろじゃ）を尋ねる所まで来ると昔う十二時

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

近くなつたので、高木は舞台(ぶたい)へ現(あら)はれて、明晩は字(じ)幕(まく)の残部を映(うつ)し、エルナニを序(じょ)幕(まく)から大切(おおぎり)まで演じ、最後に千エホフの傑作(けっさく)の一幕を演(もよ)ずる旨を広告して打出しとなつた。

音無と覚也(かくや)とは化粧部屋(けしょうべや)へ入(はい)つて行つて、高木と握手しながら成功を祝した。

「中止とは甚(ひど)いね、あんな処(ところ)で。」と覚也は憤慨(ふんがい)した口調(くちょう)で言つた。

「日本の旧劇(きゅうげき)よりは酷(ひど)いのがあるんだ

けれども」と音無は笑ひ乍ら、「新の字が付くと何でも不可いのだ」

「さうだ、新宮なんていふ名も改めなきやア不可いよ」と高木も笑つた。

「そうさ、此部は新といふ字と社會といふ字が大禁物だからナ。會社の看板を逆に置いても首か飛ぶかも知れんぜ」音無は喉を轉るやうに笑ひ乍ら言つた。

「實際、全然だからナア」と覺也は眞面目に言つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

二行アキ

音無は其晩、如何(どう)したものか昂奮(こうふん)して眠れないから、二時頃まで新聞を読んだり小説の口絵を見たりした。到頭三時近くに漸くウト＼／と眠気(けむけ)ざして来たので蒲団(ふとん)を引かぶつたが、睡付(ねむりつ)かれんかと思ふと忽ち悪夢に驚かされては覚(さ)め＼／した挙句(あげく)、隣の妻君が水汲(みづくみ)の跫(あし)音(おと)に眼を覚ました朝の八時頃から初めてグツスリと睡(ねむ)る事が出来た。

暫くするとドン＼／戸を敲(たた)く音が聞えた。

（神楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

周章て、跳ね起き寝巻のまゝ玄関へ行くと、役所のお使らしい男が一通の手紙を投込んで行つた。

封筒に「熊野警察署」と書いてあるので不思議に思ひ乍ら披いて見ると、

相尋ね度儀有之候条此通知書受領次第実印携帯の上即刻当署まで出頭すべし

若し事由なくして出頭せざる時は相当の処分する事あるべし。

といふ蒟蒻版摺の召喚状であつた。

音無は

(神楽坂下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　ガラス使用

或はエルナニ劇の事に関しての質問では無いか知ら……と思ひ乍ら警察へ行つて見ると、警察署には召喚状を持参した男女が四五十人も詰かけてゐて、署長警部補部長等七人係りで必死に聴取書を作つてゐた。音無は柱の傍に立つて四十二三歳の女が八字髭の巡査に取調べられて居るのを聞くとも無しに聞いてゐると、果して此の多数の召喚がエルナニ劇に関係した事であると知つた。

巡査は女の姓名年齢を一通り質してから、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

389

「朝日座（あさひざ）の芝居へ行つたか」と問うた。

「へえ参りました。」

「お前さんの家（うち）にはサンセットち子新聞を取つてゐるんだね。」

「へえ、読んでゐます。」

「あの新聞は何主義（なにしゅぎ）だといふ事を知つて居るのか。」

「主義？　そんなものは知りません。祝儀（しうぎ）ですか。」

「社会主義（しゃくわいしゅぎ）の新聞だといふ事を知つて居る

平成二〇（前紫苑十一日日）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

389

のかとえみのサ。」

「知りませんわ、そんな事は……」

「芝居は面白く無かったらう？」

「私らには難かしうてノシ、異人さんの芝居すすか、何が何やら解らんはノシ。」

「四十銭出したのか。」

「へえ、押ましたはノシ。」

「四十銭が惜しくなりはしないかナ、あんな芝居を見て。」

「私らの平生行くのは二銭三銭ですさかノ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

い。」

「其金を返してやらうとおもつたら、どうする？」

「夫りやア動きますはノし。」

「ではお前を置はなければよかつたと思ふんだナ。」

「まア、さう言へばさうやのし、評判で無かつたさか、まア始さんたんやわノし。」

「さうやのし、評判で無かつたさか、まア始さんたんやわノし。」

「サこセット社に始さんと思はないか。」

「さうやのし、評判で無かつたさか、まア始さんたんやわノし。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

四宝しい、これへ印を捺しなさい。」

音無は初めて聴取書とし子ものを私つた。

今調べられて居た女の向ふに五十ばかりのお

柄な男が部長に調べられて居たが、

ゆえエ、始さまりました。全で役者は素人ばかりですもの、

これまでも、エライ田に會

あれで三等鑑札を持つて居るものが、たつた

八人しか無いのです。機械は無料ちやとふふ

話ちやし、役者は全体で二十四もやれば善え

のちやらうし、一晩に三日は儲けましたナ

どうしても

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

。田舎さんもなかなか食へん人ですよ」と声高に言つて居た。音無は憮然として一二歩部長の方へ近寄つたが、部長は温順しさうな顔をして、拙々と聴取書を書いてゐた。音無は頭の中で「罪と罰」の小説にあるラスコーリニコフが警察へ召喚された時の記事を想ひ出して、あの二等警部のやうな横柄な警部が自分を取調べたなら、そして二等警部が、あのIch danke. と獨逸語で答へた白い着物を着た立派な婦人を罵つたやうに、「うぬ、貴様、

牛載二〇（神樂坂下山田製）

糞たわけ奴！』などと少し乱暴な言葉で食つてかゝつて来たなら何うしよう？」などゝ考つて居ると、部長が頭を上げて、
『何か御用事で？』と問うた。音無は召喚状を出して見せると、部長は夫れを持つて別室に行つたが、軈て再び現はれて、丁寧な言葉使ひで、
『何卒二階へお上り下さい。』と階段の所を教へて呉れた。音無は下駄穿のまゝ二階へ上つて見ると、がらんとした広い二階の正面に

中村二〇（神楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

一間幅の黒板（こくばん）を背後（うしろ）に、色の浅黒（あさぐろ）い鬚（ひげ）の薄（うす）い
饗部が机を控えて頻りに書ものをしてゐたが
音無の来たのを見て、「何卒（どうぞ）お掛け下さい」
と丁寧に言つて机の呼鈴（よびりん）を二つ鳴らした。
十五六の小使が上つて来たので饗部は巻煙
草を捻（ひね）くりながら、「山田部長に来て下さいツ
て、直ぐだよ」と言つて煙草に火を吸（す）いつけ
たが、部長の来たのを見て、
「君、一寸聴取書（きゝとりがき）を書いて呉れ給へ」
「ハツ、承知しました」と部長は饗部の傍

中義二〇（神楽坂下山田製）

の椅子に腰をかけた。
例の如く旅籍調を濟ましてから、警部は頗る慇懃に訊問を始めた。
「新劇協会の高木君とは怎ういふ関係ですか。
「白金学院の同窓です。
「エルナニ劇を、あなたは日本の国情に適した劇だとお思ひですか。
「元来外国劇ですから必ずしも日本の風俗に一致すると言へませんが、別段風教に害が

396

あるとは思ひません。」

「帝王と泥棒とか女を争ふといふやうな事は不穏當ぢやないでせうか。」

音無は黙つてゐた。

「夫れから何とかいふ女が短剣を抜いて「一足近寄れば王の生命は無い」と言ふ所があるが、あれはどうお思ひですか？」

「然ういふ部分々々の御質問では」と音無は頭を掻きながら、「エルナニ劇其物に就ては随分御議論の餘地もありませうが、抽象的に

然う

中甚二〇（神楽坂下山田製）

お尋ねになられると、一寸困ります。」

「中絶的？　僕は決して中絶しやしないです。」

「実は真面目であった。そして姿勢を正した。音無は平生で失笑する所であったが、しかし深く感じた。

「恋に他人の無言を笑はうとした小い自尊心を恥かしく思った。

「その興行に就て金銭上の問題はありません。」と音無はキッパリ答

せんですか。」

「少しもありません。」と

398

一行アキ

へん。

音無（おとなし）は鷲峯から直ぐ其足で旧家を訪問した。すると、「やア、やられたナ、君も。」と旧主は笑ひ乍ら玄関へ出て来た。
「今調べられて来た所で……」
「然うか、先ア入り給へ、」高木君も来て居るよ。」
音無が奥へ通ると、高木はくしや〱した容子（ようす）で、「閉口（へいこう）したよ、君、朝ッぱらから驚

学つ呼ばれて、うてと法を取られたよ。」

「露西亜の医学だつたら、ラスコーリニコ

フのやうに酒癖の一つでも言はれるんだが、

どうも日本の医学は威儀堂々として居るから

ネ。」

「所が僕を調べた加藤何とかいふ医部は、

イリヤ・ペトロギッチ丸からな。」「やりきれない

よ。」

「どんな事を訊かれたのかい?」

「どんなも斯んなも無い。エンナニは拙席

紊乱の恐れがあるんだとサ」
「ちやア興行停止かネ」
「マダ今晩の興行はしてないんだが、ど
うせ藝題変更を迫られるだらうよ」
「藝題を変更しちやア、入場券を買つた連
中が其儘で済まさないだらう」
「だから演るさ。愈々エニフアチカルに思
ふさま演つてやるよ」
「それは不可い。喧嘩腰になる必要は無い
よ。王と言つて悪い所は大将と言やア言ひぢ

やないか、浄瑠璃(じようるり)の文句(もんく)でも、太閤記(たいかふき)十段目で『天子将軍になつたとて……』と云ふ所の天子といふ二字を抜いて了(しま)つたり、一ノ谷嫩軍記(ふたばぐんき)では『敦盛と目ざすは安徳将軍』などといふのだもの、譲歩(じやうほ)し給へ、警察へ楯(たて)を突(つ)くのは不可(いけな)いよ』

『ぢやア君はユーゴー先生の大作を勝手(かつて)に改作しろと言ふのだナ』

『然(さ)うぢやア無いか……』

『ぢやア堂々と演(や)るより外は無い。七十八年前から全世界の何千万人に讀まれた大作が

全蔵二一〇（神楽坂下山田製）

新宮の町の人にだけ不穏(ふおん)だという理由(いわれ)があるか。大いに争うネ。」

「大変な権幕(けんまく)だな。マグダでもノラでも君、日本の舞台では肝心(かんじん)な所を引抜いてるぢやアないか。裸体画(らたいぐわ)が展覧会に出品出来ず、裸体の彫刻へは赤い腰巻を纏(ま)かせる時代だもの。」

音無が斯(か)う言った時、高木は眉間(みけん)に縦(たて)の皺(しわ)を寄せて、「ぢやア音無君、君は新約聖書のキリストという大宮を弘法大師、パウロを行(ぎやう)

寄贈二〇（神楽坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

芸菩薩（ぎぼさつ）と改名して讀めと言はれた時如何（どう）する
う、む
音吉は黙つて俯向（うつむ）いて了（しま）つた。暫くして高
木は顔色を和（やはら）げたら、
「何なアに、言はゞ今夜の事も一種の喜劇（コメデイ）サ
。今朝僕は警察署で、あんまり種（いろ）んな事を訊（き）
かれるから少々面倒臭（めんだうくさ）くなつて、西洋物がお
厭（いや）なら高山彦九郎でも遣（や）りませうかッて言つ
たら、警部は怪訝（けげん）な顔をして、（高山彦九郎
ッて俳優が居るのかッて僕ら（め）に質問したも

のだ。
　団宰も音無も思はず噴飯した。最前から始終沈黙して二人の問答を聞いてゐた団長は微笑を含みながら、
「何でも警察へ甚い投書をした者があつたらしい。今度の興行は第一思想が不可いのと、一つは誇大の広告をして不当の暴利を貪らうとする為めで、俳優の給金は一座二十四人に對して一日二十五円、活動写真のフ井ルムは無料だから一ト晩弐百円以上は儲かると誣告

したものがあるのらしい。劇場料も電氣料も税金も船賃も一切無料にして呉れゝば大体位は残るかも知れないが、税金だつて三晩で百二十円程要るんだからね。」

「そんな投書を警察が信じたのでせうかね。」

吾輩は眼を睜り乍ら苛立たしさうに聞いた。

「なアに敵は本能寺にありさ。第一廣告に社會改良策の一助としてといふ文字があつたが、あれが悪かつたね。義主會社が祟つたのだよ。」山田君は然う云つて、はツは、はツはと

と笑つた。
「民主々義？、勤王々義？、」と高木は首を
捻(ひね)つてゐた。
「主義の看板を倒にして置けない土地がある
の。」と日系は青年の顔を見て、又たはゝはと
笑つ[て]言ひなから[彼る男と]た。
「成程！」と高木も拳(こぶし)で膝頭(ひざがしら)を叩きながら
笑つた。

済

276

宿命（六）

湖畔

十九枚

通計 二百三十七枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

一行アキ

謝絶

降り続いた雨がまだ晴れない。空模様が悪いので、川原の仮家に居る人たちは葦笠で荷物を運んでいる。お帯と須芝とは縁の欄干に続いて往来の人々を眺めていると、おまが来て、

「田丸先生がお見えになりました。」

ゆさる、何卒こちらへ。夫れからナオミ先生に一寸此室へおいでくださるやうに……須芝

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

278

子さん、あんたはお部屋へ行ってらっしゃい。」

杉埜子とお末が引退ってから間も無く田架とナオミとは何か話しながら座敷へ入って来た。

「いやア今日は、雨続きで困りますナ。暫く御無沙汰しました。」

「今日は実は態々お呼立致しまして誠に済みません。」とお末は田架に挨拶しつ、ナオミをじろりと見、「ナオミさん、今日は外の話を決めて了ひたいと思って態々先生に来て戴いたんですから、あなたも御遠慮無く仰しゃ

つて下さいましョ。」

ナオミは顔を紅くして俯向いた。田島は手帳を取出して、

「では御隠居、煙々に序付けて了ひませう。考へて置くの相談するのつて云ひつとなしに、ずん〳〵解決して行きませう。」

「さう致しませう、お互ひに義心を知合つた同士ですからネ。」

「ナオミさん、」と田島は言葉を更めて、「度々申上げた事件が堅面さんとの結婚一条は

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

マダ決心がはきませんかネ。」

「私、いろ〳〵と考へましたが、」とナオミは言葉静かに、「矢張り別し方が双方の為宜しいかと存じます、どうぞ悪しからず。」

「然うですか。」と田島は寄惑したやうな顔をして、「あなたが、気が進まないなら已むを得ません。しかし堅両君とあなたとが、縁法子さんの後見となつて下されば大伴家の

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

2-81

さうなるのが順當ですが、此事丈は秘傳の
やうですが、私の理性で決めさせて下さいま
し。

お幸は膝に置いた手を揉合せながら二人の會
話に耳を傾けて居たが、

「これぱかりは私、仰しやる通り濟いて
とは勿體ありませんが、仰しやる通り濟いて
となると、堅爾が如何な自暴を起すまいもの
でもないと、私は夫れを恐れた心配をして居
ますので……出來る事ならネエ、……」と

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

2-82

「用考の餘地はありませんかネ」と田舎は
氣の毒さうにお孝を見た眼を外らして、
ナオミを振向いた。ナオミは首を垂れて黙く
無言で居たが、
「十分熟考してから申上ますつて仰しやツて
」とキツパリ言切つた。
「ヤア、とつても仕方が無い。此の話は見
に角打切りませう。」
お孝は俯向いたまゝ默つて居た。旧家は平
生の笑顏も見せずに「第二の用件は、ナオミ

さん、あなたの将来ですっ。此の後詰を謝絶なすっても此家を出て了(しま)ふお考へちやア無いで せう和(ね)。心(こゝ)

四須磨子さんの教育と此の後詰とは別問題ですもの。私の我儘(わがまゝ)丈(だけ)御挨拶を賢(かしこ)さんが許して下さるなら、私は無論(もちろん)御老(おすぎ)さんが結婚なさるまで教育して見たいのですもの(ぢさ)。此処に私らしくも私はいろ〳〵と考へました。』

『夫れで私も安心しました。』とお幸は吻(ほつ)と安心したらしく、『私は夫れを心配しました

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

ので、斯んな事で気拔くなつて了つたも甚女
が此家を出るとでも仰しやつたら、あくまた
お墓を申してる積もりが如何するかと思つて
……と袖で涙を拭いた。
母有難う、利雄君の霊も喜んで居ませう。
と母が言つた時、縁先より駈け込んで来て、
母先生、先生は東京へ帰りなさるつて、
本當？　ネ、先生、私、どうしようと。と涙と
一杯溜めてナオミさん、倚れ掛つた。
母縦令（たとえ）何所（どこ）へも行らつしやり

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

二行アキ

285

やアしないよ。何時まアでも家に居て下さるから、安心していておいでよ。」

つた。

「可愛ちやん、私は何所へも往かないのよ、何時までも何時までも此所に居ますわ。」

ナオミは堅と須基とを抱へて熱い涙をふうくと零した。

「可絶対おさん、大丈夫です。」と旧家は賛す

やうに、「ナオミ先生が何うしてあなたを捨

て、東京へ帰られるもんですか。」

「ナオミ先生が東京へ行らっしゃるなんて誰に聞いたの？」と御常は故と笑顔を見せた。

「お母さんが言ったの。」

「仕様が要ッねえ、母はすぐ調戯ったのだよ。今ネ、先生は所用があるんだから、あんたは安心して最う少し猶方へ行ってらッしゃい。」

「須うちゃん。」とナオミも態と添着いた風をして、「あなたの心配なさるやうなお話はしないのですからネ、所用の済む間、坐ッと俟方

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

287

へ行つてらつしやい。直き済みますからネ。」

須磨子は淋々と裏の外へ出て行つた。軽い足音が廊下の絨毯へ消えてゐつたと思ふ頃、田島は元気な声で、「さあ、次に移りませう。」と調子を更め、

「第三は太地家の財産問題です。現在の貯金三十一万二千円の内、十万円を太地須磨子さんに、二十万円を太地須磨子さんに、夫から一万二千円を太地章の名義にして振替貯金とし、其の利子は古庭ナオさんの月給として

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

258

居上がる、事、さうでしたなア、御隠居。

㊐はい、左様でございます。

㊐第四は太地喜和治（たいじきわじ）の名義になって ある貯金を最

後如何処分（しょぶん）するかと云ふ問題です。

㊐つまり、私が死んだ時の問題です ね。

㊐先ア然うですね、（さ）（こと）手取り早く言へば。

㊐夫れは（の）断（もと）う（さ）致しませう。最う今から古座

ナオミの名義で貯金して置きませう？

㊐勉（さ）ですか、夫れが出来れば何よりです

が……

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　ガラス使用

「ええ、然う致して置きます。さうなると其の判子も随意に使ひ下さるやうに。」

「では、然う決めませう。」と宮本は手帳へ其通りを記入した。

「夫れでは田島さん、此の約束は公正證書にでも……」

お幸の言葉の終らないうちに、宮本は頭を掉りながら、

「平妻はありません。私ら他人のお役人に證明して貰はねばならぬやうな約束なら、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

約束しなければなりません。」

「納れ給え。」

君は今晩詳しく話して置きませう。」

「では後は失敬します。」

「何有難うございました。」

「では私も二三日中に堅雨を伴れて二ヶ月京大坂を見物して来ませう。久し振りで澄江堂松の市へも墓参りに行つて来ませう。何か御序でがありましたら。」

「お帰が下宿に着いた時、旧子は疑ひ始めました。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

上つて襖の引手へ手を掛けて居た。

お幸とナオミが田口を玄関まで送り出した時、丁度時子が帰つて来て玄関に立つてゐた。

「やア、時子さんか。」と田口は靴脱ぎの上に立つて「此間は失礼致しました。」

「えエ、」と時子は何時になく沈鬱な顔をして手荷のやうにハキ〳〵した返事をしなかつた。

田口が帰ると、時子はナオミの部屋へ通さ

れた。

「暫く即無沙汰致しました。

「私とそ。」

「お父さんはお用がおありですから、私は遊んでばかり居るくせにお無沙汰ばかりして。」

時々は怨めしく言つてナオミの顔を凝然と見つめて、「鳥渡の間に大變お痩せになつたわ。」

「さう？　そんな事ア無いわ。」

「いゝえ、」と猶も肇々ナオミの顔を見ながら

ら、「知ってますが、あの事だけ心配なのです
せう？」
「心配て事もありませんが、勿論きりですから来ます」
「どう決つて？」
「きつぱり謝絶しましたのです」
「あの、大伴さんの方を？」
「ええ、私には大伴さんの一件一つしかよりませんが、問題てのはです」
時子は遮かに周章てゐるが、然うしてゐますと、私

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の言い方が悪うございました。」と取繕うように、「なんて、亡くなられた兄さんの悪口言なさるやうりませんか。」

「誰が無礼な事を申しました、」

「能うく知って居ますワ、誰から聞かなくっても……」

「遺言なんかとても結婚は自分の現性を棄てゝ定める事は出来ませんからネ。能く考えた末、キッパリ断りました。」

「然う？」と言って暫くの間は冷やかな

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

微笑が浮んだ。

二人の間には ちょうと 沈黙が続いた。俯向いて 膝の所を指先で弄つてゐたナオミは 憐れ出しさうに時々顔を見上げて 何か言い出さうとしたが、又も急に黙つて了つた。夫は二日前の晩に喧嘩が始まつて以来 時々の冷い形跡のあつた事を憐れ出したからであつた。過ぎ去つた出所はナオミに違ひ無い。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

407

寄別

宿命

二十七枚

通計三百六十七枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

409

幻滅

鮒田富士に又残つた夕日が権現川原の白い
砂を照して居る上に、熊野鳥の群が遠見ルは
胡麻を撒つゝやうに集つてゐた。水際から黒
い小犬が駈けて来ると、鳥はぱツと低く舞上
つては虚を見て又た降りて犬を調戯やうに
してゐた。

只見ると五六艘の炭船が静に帆を揚げて熊
野川を下つて来るさまが得も言はれず美しい

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

409

のて、其の家色に見(み)と塀れて高木は、も最
う六時だ。と時計を出して見、も五時半とい
ふ約束だつたが、どうしたんだらう？と
暫らく垣根(かきね)を瞰(み)てみると、高い石垣の上か
ら木の葉隠(はがく)れに見えたので、薄色(うすいろ)の羽織の女
が手巾(はんかち)を振ると、下からも手巾を振らしく
白いものがチラホラした。其うち何時(いつ)の又た
桜のお森に隠れて見えなくなつたかと忽ふと
、もお待遠(まちどう)さまでした。と時(とき)は忽ち眼の前
に現はれて、も明日(あす)出立するつもりで支度を

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

910

しとゞみましたので、いくら遅くて濟みませんが
つたら。
明日お立ちで？
ええ、九時の船で立たうと思つてます。
とゝつて、時子は、其所から邊をすし屋かうちやありませんか。
ませう。
二人な大手門の方へ行かつた。
巻寿も稽古をとゝ私と一緒ん伊勢へ行らつしやいナ。座元の方は四日から帝で興行し

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用